

子どもの見方・考え方が成長する小学校社会科単元デザイン

－目標と指導と評価の一体化を通して－

M18EP007

佐藤 貴史

1 はじめに

本研究は、小学校社会科学習において、目標と指導と評価の一体化に基づき、子どもの見方・考え方を成長させるための単元デザインを開発することを目的とする。このように目的を設定した理由は2点ある。

1点目は、子どもの「知識及び技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の基盤となる社会の見方や考え方を高めることが重要であると考えからである。池野氏は、この社会の見方や考え方を「教師がその単元を作るときに基軸とする単元内容。つまり、知識・理解、思考・判断、能力・技能、関心・態度を包括する観点(パースペクティブ)」(池野：2013, p.85)と述べている。社会科における資質・能力の基盤が社会の見方や考え方ということである。では、資質・能力の基盤となる社会の見方や考え方を高めるためにはどうすればよいのか。その手がかりとして本研究では、子どもが社会的事象をとらえるための頭の中の認知の枠組み、すなわち、子どもの見方・考え方に注目した。

2点目は、社会科の資質・能力を育成するために、単元の目標と指導と評価を関連づける必要があると考えるからである。これまでの筆者の実践を振り返ると、目標を設定して、指導を行い、評価を行っているが、実際には指導に強く意識が向いてしまっていた。そのため、指導が終わった後に、評価を後付けで行う「評価のための評価」になってしまっていたということもあった。つまり、目標と指導と評価が乖離してしまっていたということである。北氏は、目標と指導と評価の一体化について、「子ども一人一人に学力をしっかりと

身につけるためには、基礎・基本を位置づけた目標を設定すること、目標を実現するための指導の道筋を明らかにすること、授業においては指導と評価を一体化させること、さらに、目標に準拠して評価すること、すなわち、目標と指導と評価の三者の関連性・一貫性を図ることが授業の原則である。」(北：2011, p.20)と述べている。つまり、評価の規準や方法と設定した目標や実際の指導とを連動させるということである。子どもの見方・考え方を成長させながら、「知識及び技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」を育成するためには、目標と指導と評価の一体化を図る必要があると考える。

そのために本研究では、子どもの見方・考え方、目標と指導と評価の一体化に関する先行研究を考察し、子どもの見方・考え方の育成方略を構想し、それらに基づいて授業実践を行う。そして、授業実践を分析・評価し、さらに改善プランを作成して、単元デザインの在り方を追究していく。

2 子どもの見方・考え方の育成方略構想

(1)子どもの見方・考え方とは

池野氏は、社会の見方や考え方を「社会的な見方や考え方」と呼び、それに関する見解を以下のように整理している。

表1 社会的な見方や考え方についての見解

a	社会科が取り扱う領域に固有な視角 例：地理的な見方や考え方 など
b	社会科学における概念、理論 例：対立と合意、効率と公正 など
c	社会的事象を捉える認知的枠組み(観点) 例：ある事象を〇〇として見る など

池野(2013, pp.82-83)より、筆者作成

a は、主に平成 29 年度版学習指導要領における小学校社会科、中学校社会科地理的分野、歴史的分野で使われている。b は、中学校公民的分野で使われている。本研究では、c を「子どもの見方・考え方」と呼ぶこととし、研究を進める。池野氏は、c は、社会の事象をとらえるときの観点であり、ある事象を○△として見る、△△として考えるときの○○、△△にあたるものであり、その観点は階層性をもつものであると述べている(池野：2013, p.83)。では、なぜ、子どもの見方・考え方を成長させる必要があるのだろうか。

子どもの見方・考え方を成長させるのは、社会科の目標を達成するためである。認知の枠組みである子どもの見方・考え方は、子どもの外にあるものではなく、子ども自身が頭の中で構成(再構成)していくものであり、頭の中にある見方・考え方によって、社会的事象の理解は変わってくる。また、頭の中にある見方・考え方は、理解の基盤となるだけでなく、能力と態度の基盤ともなるものである。社会科の目標を達成するためにも子どもがもっている見方・考え方を成長させることは不可欠であると考ええる。

(2)子どもの見方・考え方が成長するとは

子どもの見方・考え方が成長するとはどのようなことであろうか。子どもの見方・考え方の成長を、中学年の水道水の単元を例にして述べる。

表2 子どもの見方・考え方の成長の例

レベルⅠ	実際にあるという見方・考え方 水道水が単にあるという観点
レベルⅡ	社会的につくられたものであるという 見方・考え方 水道水が人や組織によって作られているという観点
レベルⅢ	公共物という見方・考え方 公共(みんな)のために水が作られているという観点

池野(2013, p.95)より、筆者作成

水道水の単元の場合、水道水に対する子どもの見方・考え方は、3つのレベルでとらえることができる。レベルⅠは学習の出発点であるので、子どもたちにとって常識的な見

方・考え方になっている。レベルⅡは、学習によって得られた情報や事実を関連付けたり、社会的事象の意味を考えたりすることによって高まった見方・考え方になっている。レベルⅢは、教材が地域社会や日本の社会に影響を及ぼしていることやその教材にかかわってよりよい社会はどうあるべきかを考えることによって高まった見方・考え方になっている。このように、子どもたち一人ひとりが単元の学習を進める中で、その観点のレベルを高めることが子どもの見方・考え方が成長することである。

また、池野氏は小学校社会科の目標について「基本的に、到達・達成目標を表記することを目指したものであり、その学習の発展・成長、また、一人ひとりの学習の成長を明らかにしようとしていない。」(池野：2013, p.86)と述べている。私たち教師は、社会科の学習を通して、子どもが何を獲得したかということだけではなく、一人ひとりの子どもが社会科の学習を通して何をどの程度成長させたのかということにも目を向けていく必要がある。子どもの見方・考え方にはレベルがあり、子どもの見方・考え方の成長の道筋に沿って単元設計することで、子ども一人ひとりがどのように成長しているのかを見とることも可能になるのである。

(3)目標と指導と評価の一体化とは

目標と指導と評価の一体化とは、目標と指導と評価の一貫性を図ることである。石井氏は、『指導と評価の一体化』の前に、『目標と評価の一体化』を追求する必要がある。」(石井：2018, p.27)と述べている。なぜなら、評価が目標とつながることで、評価に向かって指導をすれば目標とも自ずとつながっていくからである。そこで、目標と指導と評価を関連させるために注目したのが「逆向き設計」論である。

西岡氏は「逆向き設計」論について、「カリキュラム設計にあたって、教育目標、評価方

法，学習経験と指導を三位一体のものとして設計すること」(西岡：2016，p.21)と述べている。「逆向き設計」論では，単元設計をするにあたり，以下の3つの段階を示している。

表3 「逆向き設計」論のステップ

第1段階	目標(求められている結果)を明確にする。
第2段階	目標が達成できているかどうかを確かめる 評価方法(承認できる証拠)を決定する。
第3段階	目標と評価方法に対応できる学習経験と指導を計画する。

西岡(2016，p.22)より，筆者作成
「逆向き設計」論を用いて，目標と指導と評価を一体化した授業を展開できるようにする。

(4) 単元デザインの基本方略

(1)～(3)より得られた知見をもとにして子どもの見方・考え方を育成する単元デザインの方略を示すと，以下のようになる。

- ① 子どもの見方・考え方のレベル設定，単元目標の設定
学習指導要領の分析，子どもの見方・考え方のレベルから，単元目標を設定する。
- ② 評価規準，評価方法の設定
単元目標から評価規準と評価方法を設定する。
- ③ 問いと知識の整理，単元指導計画の作成
単元末の評価規準と評価方法を意識して，単元の学習問題，各時間の問い，概念的知識，各時間の具体的知識を図に整理する。それらをもとに単元指導計画を作成する。
- ④ 各時間の指導計画の作成
単元末，各時間の評価規準・評価方法を意識して，指導計画を作成する。子どもの見方・考え方を成長させるために，「どのように(な)型」と「なぜ型」の問いをセットで各時間を構成する。

3 単元「自動車づくりにはげむ人々」の計画と実践

(1) 授業実践の概要について

単元は，第5学年「自動車づくりにはげむ人々」である。山梨県内の公立A小学校1学級(25名)を対象に，2018年10月から11月にかけて実践を行った。本単元の目標は，以下の通りである。

- ・工業生産に関わる人々は，消費者の需要や社会の変化に対応し，優れた製品を生産する様々な工夫や努力をして，工業生産を支えていることや企業の利益や社会全体のために工夫や努力をしていることを理解す

るとともに，地図帳や統計，写真などの資料を調べ，まとめることができるようにする。(知識・技能)
・社会的事象の見方・考え方を働かせ，工業生産に関わる人々の工夫や努力について，調べたことを関連付けたり総合したりして，工業生産の特色や相互の関連，意味について考えたことを表現するとともに，これからの工業生産の発展について，根拠や理由を明確にして説明することができるようにする。(思考力・判断力・表現力等)
・学習問題を追究，解決するために，社会的事象について調べたり，社会的事象の特色や相互の関連，意味を多角的に考えたりして，自分のもっている見方・考え方を高めることができるようにするとともに，学習を振り返り，自己評価能力を高めることができるようにする。(学びに向かう力)

本単元で設定した子どもの見方・考え方は，以下の通りである。

表4 本単元における子どもの見方・考え方

I	日常的な見方・考え方 自動車というものが単にあるという観点
II	社会的につくられたものであるという見方・考え方 自動車が自動車生産に関わる人々の工夫や努力によってつくられているという観点
III	商品としてつくられたものであるという見方・考え方 企業の利益のために自動車が作られているという観点
IV	社会のニーズからつくられたものであるという見方・考え方 みんな(個人，企業，社会)のために自動車がつくられているという観点

本単元では，子どもの見方・考え方のレベルⅢに「商品としてつくられたものであるという見方・考え方」を設定した。新しい学習指導要領では，社会科の内容の取扱いにおいて，多角的に考えることが求められている。その1つの視点として，生産者や消費者の立場と価格と費用を関連付けて考えられるようにしたいと考える。また，工夫や努力の学習に加えて，「商品としてつくられたものであるという見方・考え方」を入れることによって，より社会の現実をとらえられるようになると考える。岩田氏は，産業学習では，人の行動の原理を知るために以下の5つの視点から社会的事象を見ることが重要と述べている。

- (i)生産者はできるだけ安くて品質のよい品物を作ろうと工夫と努力をしている。
- (ii)生産者は消費者の要求に合って利益の上がる品物を作ろうと工夫と努力をしている。
- (iii)消費者はできるだけ安く品質のよい品物を手に入れたいと望んでいる。
- (iv)消費者は個性のある品物ならば，値段が高くても手に入れたいと望んでいる。
- (v)環境保全，公害防止のための費用は，品物の値段に加わってくる。したがって，その費用は社会が要求する最低値で決定される。そして最低値を安い費用で実現できるように工夫や努力が行われる。

岩田(1991，pp.73-74)より

本単元では学習指導要領にこたえつつ、「商品としてつくられたものである」という見方・考え方を設定することで、子どもが工夫や努力を個人の側(人間の働き)からだけでなく、社会の側からもとらえられるようにしたいと考えている。本単元の評価規準と評価方法は、以下の通りである。

【知識・技能】	
・自動車づくりに関わる人々は消費者の需要や社会の変化に対応し、優れた製品を生産するよう様々な工夫や努力をして、自動車づくりを支えていることを理解している。	
・自動車づくりに関わる人々は、国民が便利な生活を送るとともに、企業の利益、持続可能な社会をつくるために新しい技術を開発していることを理解している。	
・地図帳や各種の資料から、必要な情報を集めて読み取っている。	
・情報を整理して図や言葉でまとめている。	
【思考・判断・表現】	
・自動車づくりに関わる人々の工夫や努力について、学習問題や予想、学習計画を考え表現している。	
・社会的事象の見方・考え方を働かせ、自動車づくりに関わる人々の工夫や努力について、調べたことを関連付けたり総合したりして、自動車づくりにかかわる人々の働きを考え、文章で記述している。	
・調べたことをもとにして、我が国の自動車づくりの発展について自分の考えをまとめている。	
【主体的に学習する態度】	
・学習問題を追究、解決するために、社会的事象について調べたり、社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考えたりして、自分のもっている見方・考え方を高めている。	
・学習を通して変容したことや自分の成長について振り返っている。	

表5 本単元の評価方法について

	集める情報	評価対象
技能・知識	知識の獲得状況 技能の習熟状況 子どもの見方・考え方の成長の様子	各時のまとめ ペーパーテスト 資料活用場面 パフォーマンス課題
断思・考・表・現判	思考している状況 判断している状況表現 している状況 子どもの見方・考え方の成長の様子	思考・判断場面 パフォーマンス課題
態度 学習する主体的に	自己の学習への評価状況 子どもの見方・考え方の成長の様子 学習に取り組む様子	パフォーマンス課題 振り返りシート 授業に取り組む様子 事後アンケート

本単元では、子どもの見方・考え方の活用状況、各観点の到達状況を見とることを目的として、パフォーマンス課題を設定した。パフォーマンス課題は、パフォーマンス課題のシナリオに織り込むべき6要素(西岡：2016, p.97)をもとに作成した。パフォーマンス課題

は、以下の通りである。

ここは〇〇出版社です。あなたは雑誌の編集者です。今回、〇〇出版社で自動車づくりの特集号をつくることになり、あなたはその担当になりました。「なぜ、日本の自動車会社は質のよい自動車をたくさん作って届けられるのか」ということについて、社会科の時間に学習したことを使って書いてください。

本単元は、全15時間で行った。各時間の主な問いと子どもの見方・考え方のレベルは以下の通りである。

Lv.	時	各時の問いと発展した問い
Ⅰ (日常的な見方・考え方)	1	わたしたちと自動車にはどんなつながりがあるのだろう。
	2	自動車づくりの様子から、学習問題をつくろう。 自動車会社は、どのように性能のよい車を速くたくさんつくってとどけているのだろう。
Ⅲ (社会的につくられたものであるという見方・考え方)	3	質のよい自動車を速くつくるためにどのような工夫をしているのだろう。
	4	なぜ、自動車会社は質のよい自動車を速くつくる工夫をしなければならないのだろう。
	5	自動車の部品はどのようにつくられているのだろう。 なぜ関連工場は組立工場の近くにあるのだろう
	6	自動車はどのように消費者に届けられるのだろう。 なぜ、300km以内はキャリアカーで運ぶのに、それ以上は船を使うのだろう。
	7	自動車は外国の消費者にどのように届けられるのだろう。 なぜ、自動車会社は海外生産を増やしているのだろう。
	8	自動車関連工場はどこにあるのだろう なぜ、自動車会社はこのような場所に工場を建てるのだろう。
	9	学習問題について考えをまとめよう。
	10	パフォーマンス課題①・振り返りシート
	11	自動車づくりには、どんな課題があるのだろう。 日本の自動車会社は、どんな自動車づくりをめざしているのだろう。
	12	自動車会社はどのような自動車を開発しようとしているのだろう。
Ⅳ (社会のニーズからつくられたものであるという見方・考え方)	13	自動車会社ではどんな取組をしているのだろう
	14	これからの日本の自動車づくりのキーワードは何だろう。
	15	ペーパーテスト、振り返りシート

(2) 実践の結果

実践の結果は以下の通りである。

①子どもの見方・考え方の変容		
レベルⅠ⇒レベルⅡ・Ⅲ・Ⅳ：12人		
レベルⅡ⇒レベルⅣ：3人		
レベルⅠ⇒レベルⅡ・Ⅳ：10人		
②知識・技能の到達状況		
90%以上：19人／25人		
60%～89%：5人／25人		
60%未満：1人／25人		
③思考・判断・表現の到達状況(評価基準)		
段階	評価基準	人数
4	自動車づくりに関わる人々の働きについて、複数の事象を総合するとともに、企業の利益と関連付けて文章に書いている。	1人
3	自動車づくりに関わる人々の働きについて、複数の事象を総合して文章に書いている。	12人
2	自動車づくりに関わる人々の働きについて、1つの事象を根拠にして文章に書いている。	10人
1	自動車づくりに関わる人々の働きについて、根拠をあげて文章を書くことができない。	2人

4 単元「自動車づくりにはげむ人々」の成果・課題と改善プラン

(1)本実践の成果と課題

本実践の成果について、2点述べる。

1点目は、すべての子どもが、学習前にもっていた自動車に対する見方・考え方のレベルを向上させ、レベルⅣに達することができたということである。

2点目は、子どもの見方・考え方に「商品としてつくられたものであるという見方・考え方」を設定することによって、自動車づくりを働いている人たちの工夫や努力としてとらえ、社会を共感的に理解するだけでなく、工夫や努力の背景となっている社会の現実をとらえながら追究することができたということである。

以上の成果があった一方で、課題もあった。課題について、4点述べる。

1点目は、子どもの見方・考え方の変容において、すべての子どもがレベルⅣに達していたり、各時間のまとめと振り返りにレベルⅢについて記述していたりしていたが、最終的にレベルⅢの見方・考え方を飛び越してい

る子どもが半数いたということである。その原因は、設定した子どもの見方・考え方のレベル設定に無理があったからである。筆者はレベルⅢとレベルⅣの見方・考え方について、レベルⅣの方がより広い視野で自動車をとらえられていて子どもにとっては理解が難しいと考えていたが、レベルⅢを飛び越した子どもが半数いた。つまり、レベルⅢの見方・考え方の方が子どもにとって難しかったということである。麻柄・進藤(2008)は、大人でも企業が利益のために活動していることを理解することが難しいと述べている。

2点目は、パフォーマンス課題が子どもの見方・考え方の成長を的確にとらえられるものになっていなかったということである。その原因は、目標とパフォーマンス課題がずれてしまっていたからである。本単元のパフォーマンス課題は、「なぜ、日本の自動車会社は質のよい自動車をたくさん作って届けられるのか」、「自動車づくりを発展させるためには、どうすればよいのだろうか」であり、これらの課題は、子どもの見方・考え方のレベルⅡ・Ⅳに対応するもので、レベルⅢには対応していなかった。したがって、レベルⅢの見方・考え方を含んで設定した単元の目標の達成の状況をとらえることはできなかった。それとともに、特に1つめのパフォーマンス課題は、授業で習得したことを再現させるだけのものになってしまっていて、思考力を見とることが難しいものになった。また、評価方法を設定したが、形成的評価と総括的評価が混同してしまい、評価を指導につなげられないこともあった。

3点目は、第9時と第14時での学習問題に対するまとめがレベルⅡ・Ⅳの見方・考え方に対応する内容がほとんどで、レベルⅢの見方・考え方に対応する内容は書けなかったということである。その原因は、単元の学習問題が設定した子どもの見方・考え方のすべてを含んだ問いになっていなかったからであ

る。つまり、学習問題と目標がずれてしまったということである。

4点目は、第3時から第8時では、1時間の中に2つの問いを設定したが、各時間のまとめでは1つめの問いに対するこたえの記述で終わっている子どもが多くいたことである。その原因は、各時間のめあてとまとめの整合性を意識して書かせたため、各時間の後半に設定した問いに対する子どもたちの意識が弱くなっていたからである。本実践の成果と課題をもとに、改善プランを提案する。

(2) 単元プランの改善

① 見方・考え方のレベル設定の改善

I	日常的な見方・考え方 自動車というものが単にあるという観点
II	社会的につくられたものであるという見方・考え方 自動車が自動車生産に関わる人々の工夫や努力によってつくられているという観点
III	社会のニーズからつくられたものであるという見方・考え方 みんな(個人, 社会)のために自動車がつけられているという観点
IV	商品としてつくられたものであるという見方・考え方 企業の利益のために自動車がつけられているという観点

先述したように、子どもにとって難しいとされる「商品としてつくられたものであるという見方・考え方」をレベルIVに設定し、共感的に理解しやすい「社会のニーズからつくられたものであるという見方・考え方」をレベルIIIに設定した。改善プランでは、レベルIVまでを射程に入れているが、レベルIVの見方・考え方については、すべての子どもが到達を目指すものとはせず、発展した見方・考え方として位置付け、レベルIIIの見方・考え方への到達をすべての子どもが目指すものとしている。

②-1 パフォーマンス課題の改善

パフォーマンス課題
ここは〇〇出版社です。〇〇出版社では、小学生向けに、日本の工業を紹介する本をつくります。あなたは、日本の工業の特色のページを担当することになりました。
教科書の製鉄業、石油工業、食料品工業の中で調べたい工業を選び、その工業と自動車工業がどのように似ているのか、そして日本の工業の特色は何かを説明する文章を書きましょう。

このパフォーマンス課題は、授業で扱っていない工業と自動車工業を比較したり、それらの共通点を考えたりするものである。そうすることで、子どもは授業で学んだことを活用することができる。教師は、自動車工業の理解状況や教科書の資料を使う技能を見とるとともに、思考力をより見とることができる。

②-2 評価方法の改善

	集める情報	評価対象 (診)診断的評価、(形)形成的評価、(総)総括的評価
技能 知識	知識の獲得状況 技能の習熟状況	各時のまとめ(形) 単元末テスト(総) 資料活用場面(形)
断 思考・表現	思考している状況、判断している状況、表現している状況	思考・判断場面(形) パフォーマンス課題(総)
態度 学習主体的に	自己の学習への評価状況 子どもの見方・考え方	授業態度(形) パフォーマンス課題(総) 振り返りシート(診・形・総) 事後アンケート(総)

実践では、集める情報と評価対象だけを明確にしていたが、「何を評価するのか」だけでなく、「評価対象を何に活用するのか」を明確にすることで、評価と指導をよりつなげることができると思う。そこで、評価対象に形成的評価、総括的評価を示すこととした。

③-1 改善プランA(問題解決型単元)

Lv	時	各時の問いと発展した問い
I	1	わたしたちと自動車にはどんなつながりがあるのだろう。
	2	自動車づくりの様子から学習問題をつくろう。 なぜ、日本の自動車会社は、売り上げが世界トップレベルなのだろう。
II・(IV)	3	質のよい自動車を速くつくるためにどのような工夫をしているのだろう。
	4	なぜ、自動車会社は質のよい自動車を速くつくる工夫をしなければならないのだろう。
	5	自動車の部品はどのようにつくられているのだろう。 なぜ、関連工場は組立工場の近くにあるのだろう。
	6	自動車関連工場はどんなところにあるのだろう。 なぜ、自動車会社は、〇〇に工場を建てるのだろう。
	7	自動車はどのように消費者に届けられるのだろう。

		なぜ、300km 以内はキャリアカーで運ぶのに、それ以上は船を使うのだろう。
	8	自動車は外国の消費者にどのように届けられるのだろう。 なぜ、自動車会社は海外生産を増やしているのだろう。
Ⅲ・Ⅳ	9 10	自動車会社は、環境や人にやさしい自動車をつくるために、どのような取組をしているのだろう。 なぜ、自動車会社は環境や人にやさしい自動車づくりをしているのだろう。
	11	なぜ、自動車会社は多くの費用や苦勞をかけてまで様々なニーズにこたえなければならないのだろう。
Ⅳ	12	なぜ、日本の自動車会社は、売り上げが世界トップレベルなのだろう。 なぜ、日本の自動車会社は、よい車をつくり続けているのだろう。
	13 14	パフォーマンス課題
	15	ペーパーテスト・振り返りシート

改善プラン A は、学習問題を「なぜ、日本の自動車会社は、売り上げが世界トップレベルなのだろう」に改善した。第 11 時に「商品としてつくられたものであるという見方・考え方」を深める時間を設定した。第 12 時の学習問題を解決する時間には、2 つめの問いを設定し、レベルⅣの見方・考え方への展望を開くようにする。このようにすることで、実践した単元プランよりも、「商品としての見方・考え方」に到達できる子どもが増えると考えられる。

③－2 改善プラン B(プロジェクト型単元)

Ⅱ・Ⅳ	1	わたしたちと自動車にはどんなつながりがあるのだろう。
	2	教科書を読んで、はてなを見つけよう。 自動車づくりについて伝える教科書の内容をバージョンアップさせよう
	3	自動車づくりはどのように進められ、どのような工夫が行われているのだろう。
	4	なぜ、組み立て工場では様々な工夫が行われているのだろう。
	5	自動車に使われる部品は、どのようにして自動車工場にとどくのだろう。 なぜ、関連工場は自動車工場の近くにあるのだろう。
	6	自動車工場と関連工場は、どのように結びついているのだろう。 なぜ、組み立て工場と関連工場は協力してつくらなければならないのだろう。
	7	自動車工場は、どんな場所にあるのだろう

		なぜ、自動車工場は〇〇につくられているのだろう。
	8	工場で完成した自動車は、どのように出荷されていくのだろう。 なぜ自動車を大切に扱っているのだろう。
	9	自動車を輸送する交通網や輸送のしかたの工夫はどのようになっているのだろう。 なぜ、300km 以内はキャリアカーで運ぶのに、それ以上は船を使うのだろう。
	10	自動車は、人々のどのような願いを取り入れて、つくられているのだろう。 なぜ、自動車会社は様々なニーズにこたえなければならないのだろう。
Ⅲ・Ⅳ	11	働く人や地域の環境のために、工場ではどのような工夫をしているのだろう。 なぜ、工場では働く人や地域の環境のために様々な工夫をしているのだろう。
	12 13	グループで分担して、教科書をバージョンアップさせよう。
	14	ペーパーテスト・振り返りシート

改善プラン B は、プロジェクト型の単元である。このプランは、学習問題「自動車づくりについて伝える教科書の内容をバージョンアップさせよう」自体をパフォーマンス課題と位置付けている。

④各時間の指導計画の改善

各時間のまとめでは、その時間のはじめに設定した問いに対するこたえを書く場合もあるが、大きな問いを 2 つ設定した場合は「組み立て工場ではどのようなことをしていて、なぜそうしているのか」などというようにまとめの仕方を指導の流れに沿って変える必要がある。そして、まとめは子ども自身が個人で行い、まとめた内容を学級全体で確認する。

振り返りについては、「授業の中で一番大事だと思ったこと」を書かせるようにする。子どもが学習内容(知識・学び方)を考えて表現することで、教師は子どもの頭の中に何が残っているのかを知ることができるとともに、子どもにとっては要点をまとめることになる。

5 おわりに—小学校社会科単元デザインの要件—

実践の考察より、子どもの見方・考え方の育成方略を改めて示すと以下のようなになる。

(1)子どもの見方・考え方のレベル設定， 単元目標の設定

学習指導要領の分析，教材研究から子どもの見方・考え方のレベルを設定し，それらをもとに単元目標を設定する。子どもの見方・考え方のレベルは，学習内容に応じて，全員が到達する見方・考え方と発展的な見方・考え方を設定する。

(2)評価規準，評価方法の設定

(1)をもとに評価規準を設定し，評価対象，評価方法を明確にする。目標と評価規準，評価方法を吟味してつなげるようにする。パフォーマンス課題を設定する際には，学習内容を再現するだけではなく，それを活用して他の事象等について考え，表現できる課題を設定する。そのようにすることで教師は知識の評価と思考力の評価を区別できる。

(3)問いと知識の整理，単元計画の作成

単元末の評価規準，評価方法を意識して，単元の学習問題と概念的知識を設定し，子どもの見方・考え方の成長の道筋に合わせて，各時間の問いと具体的知識を設定して図に整理する。それらをもとにして単元指導計画を作成する。

(4)各時間の指導計画の作成

単元末，各時間の評価規準，評価方法を意識しながら，各時間の指導計画を作成する。学習内容に応じて，問いを２段階に設定することも考えられる。まとめをめあてだけに対応させるのではなく，深まった問いにも対応させるようにする。

また，１つの単元ですべての子どもの見方・考え方が目標通りに成長しないことも考えられるが，複数の単元や学年をつなげて成長をみていくことも必要である。

最後に，本研究で残った課題について述べる。本研究では，教師の発問・指示を中心に授業を展開した。子どもが頭の中にもっている見方・考え方を使って考え，互いに表現する(話す・書く)ことによって，子どもは自分

の見方・考え方の限界に気付いたり，見方・考え方を高めたりすることができる。したがって，子ども同士が対話することによって，子どもの見方・考え方の成長がさらに望めると考える。この点については，次年度の課題としたい。

引用文献

- 有田和正ほか(2014)『小学社会 5 上』教育出版
- 堀哲夫(2013)『教育評価の本質を問う一枚ポートフォリオ評価OPPA』東洋館出版社
- 池野範男(2013)『『小学社会』における『社会的な見方・考え方』の成長』池野範男ほか編著『社会科の新しい使命「小学社会」のめざすもの』日本文教出版 pp.80-103
- 石井英真(2018)「新教育課程を生かす評価のあり方」『リーダーズ・ライブラリ』8 ぎょうせい pp.26-29
- 岩田一彦(1991)「産業学習の内容」『小学校産業学習の理論と授業』岩田一彦編著 東京書籍 pp.57-76
- 片上宗二(2011)『「社会研究科」による社会科授業の革新—社会科教育の現在，過去，未来—』風間書房
- 北俊夫(2011)『子どもの学力をつける学習評価』文溪堂
- 麻柄啓一，進藤聡彦(2008)『社会科領域における学習者の不十分な認識とその修正』東北大学出版会
- 文部科学省(2017)『小学校学習指導要領解説社会編』日本文教出版
- 森才三(2015)「社会科授業における『なぜ』発問の実践方略—『問いの対象』と『問いの観点』に注目して—」全国社会科教育学会『社会科研究』82 号 pp.13-24
- 森分孝治(1997)「社会科における思考力育成の基本原則—形式主義・活動主義偏向の克服のために—」全国社会科教育学会『社会科研究』47 号 pp.1-10
- 西岡加名恵(2015)「教育評価とは何か」西岡加名恵，石井英真，田中耕治編著『新しい教育評価入門』有斐閣 pp.2-12
- 西岡加名恵(2016)『教科と総合学習のカリキュラム設計—パフォーマンス評価をどう活かすか』図書文化社

謝辞

本研究を進めるにあたって，貴重な授業実践の機会を与えていただくとともに，温かくご指導くださった連携協力校の先生方，勤務校の先生方，教職大学院の先生方に厚く御礼申し上げます。